
clarity love 番外編

朱希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

clarity love 番外編

【Nコード】

N4588V

【作者名】

朱希

【あらすじ】

clarity loveの番外編を書きつつっていく予定です。

君色のマグカップ

新聞に挟まっていた一つのチラシ。

そこから出来事は始まった。

clarity love 君色のマグカップ

とある夏の日、今日も香南は七海の家遊びに来ていた。

双子は一日中おもちゃで遊んだり、テレビと一緒に観賞したり楽しい時間を過ごした。

テレビ鑑賞の途中で双子がお昼寝をしまい、途端二人でテレビを見ることとなった。なんら楽しくない番組だったがとあるファミレスのCMが放映された。

「あ、ここ、明日開店するんです。」

七海が興味深々にCMを見ていた。

「へえ。」

一緒にじっとCMを見ていると七海が少し嬉しそうに新聞の広告チラシを持ってきた。

「これです!」

ニコニコしながら見せるそれは、そのファミレス開店を知らせるチラシだった。

『開店当日に来店された方にネズミーマグカッププレゼント!』

「明日、琴乃と行ってくるんです!ネズミーのマグカップゲットしてきます!」

その意気込みはまさにタイムセールに向かうお母様方のようだった。マグカップぐらいいくつでも買ってくるのにも思いながら良かったなど香南が微笑むと、七海の携帯が突然鳴りだした。

「もしもし?あ、琴乃?」

まさにタイムリーに琴乃から電話がかかってきた。

最初は笑顔で答えていたが徐々に顔が悲しそうに眉を下げる。

「あ、そうか。それじゃあ無理だね。ううん。大丈夫!また行こう!じゃあね」

ピツと切ると七海が苦笑しながら香南の方を向く。

「残念ながら、明日中止になっちゃいました。」

「そうか。」

七海の顔は本当に残念そうで、香南は見ていられなかった。

そして思わず。

「それなら、俺がついていく。」

そう言ってしまった。

「いつてらっしやーい 楽しんできてね。」

「いつてらっしやーい」

夏流が七海のうちの玄関から双子と一緒にお見送りをしてくれる。次の日夜の少し遅い時間にメンバーを引き連れ香南が七海の家に戻ってきた。

昨日の約束を果たすためである。

香南はサングラスをかけ、深く帽子をかぶり下はジーパン上は黒のTシャツと何ら変わり映えない姿だったが少し緊張しているようだった。

「大丈夫ですか？」

ファミレスは人が多い場所であり香南にとっては行く気もしない場所だと思ったからだった。

「大丈夫。早く行かねえと閉まっちゃうし、行くぞ。」

この夏、香南はいろんな所へ行った。

もちろん気分が悪くなったりしたこともあったがそれなりに人ごみに慣れる努力はしたのだった。

そしてなにより七海が傍にいとそれだけで気分が悪くなること少くないということを知っていた。

気分が悪くなったら帰ればいい。

そう覚悟し、香南はファミレスに向かった。

「いらっしゃいませー本日はありがとうございます」

閉店1時間前ぐらいに来たからか客はだいぶ減っており、心配するほどの人ゴミでもなかった。

「…二人だ。タバコは、すわねえ」

「っかし、こまりました！」

香南のかっこよさにあてられたのか、女の店員は顔を真っ赤にさせながら案内する。

しかし香南は全く気付いておらず、むしろ店員であるかと女と会話できたことにほっと安堵していた。

七海はその女店員から早速ネズミーのマグカップをもらった。

「ありがとうございます！」

中を開けると一つは黄色の一つは青色のおそろいの可愛いデザインのマグカップだった。

「よかったな」

「はい！！可愛いっ！来てよかったです。」

七海の笑顔に香南も柔らかく微笑んだ。

ここに来る目的を果たしたもののやはり注文しなければならぬと香南はコーヒーを、七海はケーキを頼んだ。

「ふふっ今度は双子もつれてこないと、怒られちゃいますね」

七海がメニュー表を見ながらくすくす笑う。

ファミレスと言うだけあって子供のためのメニューも多い。

お子様セットもA、Bなど種類が豊富だった。

「そうだな。このメニューにはハンバーグも入ってるし、あいつら好きそうだな」

香南も一緒にメニュー表を覗く。

よくよく考えると香南と七海が二人で出掛けると言うことは今まで全くなく、これが初めてのことだと言うことに気がつく。

途端に顔を真っ赤にし七海に心配される。

「どうかされましたか？」

七海はマグカップのことで頭がいっぱいのようにまるで気づいていないようだった。

「いや、なんでもない」

お冷をごくごく飲み干す。何故か喉がからからだった。

いつもは双子と一緒にいてワイワイ過ごしてい手それも楽しいと思っていたが、七海と二人だけの世界はとても穏やかで時間を忘れてしまいそうになる。

この気持ちも悪くない、と香南は口端をあげた。

しばらくすると店員がコーヒーとケーキを持ってきた。

それぞれを香南と七海に渡していたが何とも言えないぐらいじろじろと顔を見られた。

七海ははっと気づく。

もしかして、香南さんがきていることがばれているのでは…？

香南の方を向くと薄々感ずいていたらしく眉をひそめていた。

「あっあの、」

七海が声をかけると香南が一気にコーヒーを飲み干し店員を呼ぶ。

「このケーキテイクアウトにするから箱頂戴。」

「は、はい、かしこまりました。」

徐々に周りの客からもヒソヒソ話が聞こえてくる。

『あれって、もしかして…』

『えっうそまさか…』

店員が箱を持ってくると急いでケーキを詰め、店員に金を渡す。それはコーヒーとケーキの値段を足しても多すぎる金額だった。

「迷惑かけたな。」

香南は七海の手を引っ張ると颯爽と店から出て行った。

早歩きで出てくると近くの公園まで戻ってきていた。

その頃には少し息が上がっており、うっすらと汗も出てきていた。

「ここで、少し休むか。」

二人で近くのベンチに座る。

空を見上げると満天の星達が自らを主張するために光り輝いていた。

「綺麗、ですね」

「ああ。」

二人で夜空を見上げ続ける。

「今日は、悪かったな。」

香南が空を見上げながら言う。

「いいえ。私も考えなしでした。」

七海が下をむくが香南の方を見つめる。

「けど、こんなに素敵なものをいただけだったので満足です。」

青いマグカップの方を香南に渡す。

香南は驚いて目を見開く。

「七海の家で使わなくてもいいの？」

香南が返そうとするが七海はさえぎる。

「いいえ。これは香南さんのものです。今日は本当にありがとうございました。」

「さいました。」

七海の笑顔に思わず顔を真っ赤にする。

「っありが、とう。」

香南は少し照れながら、それでも嬉しそうにマグカップを受け取った。

それから香南が録音するスタジオには青いネズミーのマグカップがいつも傍にあった。

まるでそこからメールを送っているように

君色のマグカップ（後書き）

リクエストをいただきましたので書かせていただきました！
どうでしょうか…？

リクエストありがとうございました！

マシユマロ B L (前書き)

キスしますので大分B Lです。気をつけてください。

マッシュルーム BL

ふわふわ

ふわふわ

マッシュルームみたいに

僕の気持ちは浮いている。

clarity love
マッシュルーム

周と同じ学校に通うことができ早半年、僕は周のモテっぷりをことごとく見せられる。

「周、今度遊ぼうよ。」

「え、由香と遊ぶって言ったじゃん。」

「ねえ、いいでしょ。」

辞書を返しに周のクラスへ行くと周の周りには女の子達が傍にいた。胸がずきずきする。痛い。

少しだけ胸を抑えていると周が気付いたのかこちらに向かってくる。すると胸の痛さは消えた。

「どうしたんだい？」

素敵な笑顔で答えてくれる。それに真っ赤になると今日来た目的を果たすために辞書を差し出す。

「はいっ、辞書、ありがとう。」

差し出した時の手にさりげなく触れる周。

思わず辞書を落としてしまうそうになった。

周がわかっていたかのように辞書を掴むとクスリと笑う。

「こちらこそ、もってきてくれてありがとう。」

その声に心臓の奥底がきゅっとなる。

そしてさらに顔が真っ赤になるのがわかった。

そうこの気持ちも僕は知っている。
何度も何度も経験しているのだから。
けれども言っただけじゃない。
だって周はこんな僕を絶対好きじゃないと思う。
こんな醜い僕を見せたくない。

数日後の放課後、周が掃除当番と言っから帰りを待っていた。
それなのに、20分、30分しても迎えに来ない。
最近一緒にいるようになった香南も流石に眉をひそめ「遅いな」と
呟く。

少しだけなら様子を見に行ってもいいよね？

「僕、ちょっと見てくる。」

「あ、おい」

気づけば足は周の教室へ向かっていた。

夕日が沈む中ついた教室内には周がいた。
そしてもう一人、女の子が向かい合っていた。
その表情はいつもぼくには見せない表情で、
いつの間にか胸がずきずきと痛くなつて、
涙が出たと思つたら

「だめだっ！！！！！」

周のもとへ駆け出していた。

女の子も不思議そうな顔をしてこちらを向いている。

周も少し驚いた様子だった。

慌てて自分がしたことに気付き顔を真っ赤にする。

「ご、ごめんなさい」

周の手を引つ張ると教室から出て行った。

「はあ、はあ」
息切れが激しい。

どこでもいい、あの場所から離れたくて誰も使わないような史料室
へ来ていた。

「ご、ごめん。僕、」

汗をぬぐいながら謝まる。周からの声はしない。

嫌われちゃった…？

思わず涙があふれ出す。

周はそんな僕の頭を撫でる。

「君は、どうしてそんなことしたのかな？夏流。」

その声は怒ってもおらずかといって嬉しそうでもなかった。

「ぼ、僕、駄目なんだ。」

涙を必死にふきながら言う。

「周が誰か女の子と話していると、僕のことは良いのになって。胸が痛くて。痛くて。苦しくて。」

涙は止まらなくて、最初よりももっと大きな粒が流れ出る。

「ごめんっ、けど僕…」

続けようとしたが続けられなかった。

周の唇が僕の唇と重なっていたから。

苦しくて、必死にはがそうとするとさらに周は力を込め離れられなくなった。

ようやく唇が離れると涙は止まったが、息をするのでいっぱいっぱいの状態になった。

「はあっはあ、あま、ね？」

不思議そうな顔を見ると、周の唇はにやりと口端をあげていた。

「それは嫉妬かな？」

その声はいつもより低くて、けれど心にずしんと来る低さで顔が真っ赤になってしまった。

「ふふっ可愛い。思わず、食べちゃいたいくらい。」

周が舌なめずりをする。

ドクリ

心臓の音が突然大きくなった。

僕の気持ちはふわふわしててマシユマロみたいで

けれどーっだけ

君への想いは変わらない。

マシユマロ B L (後書き)

この話の中で一番かわいそうなのは香南です。(笑)
昨日とある漫画を読んでいて書きたくなりました(笑)

らじくら！ 前編（前書き）

ラジオのなかで質問に答えるものになっております。

らじくら！ 前編

「みなさんちゃおちゃおー 今日もラジクラ！の時間がやってきましたー！いえーい！ナツルですー！」

「アマネだよ」

「リヨウです」

「・・・」

「ちよつと、カナン！」

「・・・カナン」

「ぶー！毎週 anfang と一緒に anfang のことを知っていきこうと始まったこの番組！今日は全員集合です！カナンなんか何ヶ月ぶり？」

「・・・しらね」

「うーんそうだなあカナン君半年振りじゃない？何をしていたのか、ファンの皆に教えてあげなよ」

「は？」

「そーだぜ？今年の夏はいっぱいイベントあったんだろ？」

「どこ行ったのさー！」

「・・・ハイキング行った。」

「」「ぶっ・・・それで？」

「・・・(いらっ)べつに」

「なにそれー！！僕たちが一生懸命はなしきいてんのに！まあ、いやーさて今日はやることいっぱいあるよー！企画！質問に答えようのコーナースペシャル！今週は50問中25問やるよー！皆で答えようねー！」

01 お名前をどうぞ!!
ナツ「なっちゃんです」
アマネ「アマネだよ」
リヨウ「リヨウです」
カナン「カナンだ」
02 性別は？
アマネ「全員男だよ」
03 誕生日！
ナツ「7月16日！」
アマネ「10月21日」
リヨウ「12月7日」
カナン「3月23日」
04 身体的特徴（身長とか顔立ちとか色々）
ナツ「んーブロンド色の長い髪に身長は165ぐらい？顔立ちかあ
…女の子っぽいかもね」
アマネ「前髪が長いよ。色は黒かなあ。身長は182センチ。目は
細いかもね。割と色白かな？」
リヨウ「髪の毛みじけえな。黒色だし別になんもしてねえって感じ。
肌は最近サーフィン行ったから黒い身長は一番でかいな。186」
カナン「左側に赤のメッシュ入れているが、他は全部黒。肌はやけ
ねえから白い。身長は177ぐらいだった。」
05 動物に例えると？
ナツ「僕はペルシャ猫！気品あるでしょ？」
アマネ「俺は蜘蛛？」
ナツ「蜘蛛？違うよー！コウモリ？ヴァンパイアみたい！」
アマネ「（クスツ）それ動物？」
リヨウ「俺は・・・トラとかそんな感じか？肉食系だな。カナンは
？」

カナン「・・・しらね」

ナツ「知らないってどづいづこと！もっといろいろあるでしょ！？」
カナンはね「・・・うんざり」

カナン「・・・は？」

ナツ「だって寂しがりやさんでしょ？」

06 特技は？

アマネ「俺はベース」

ナツ「ギター！」

リョウ「ドラム」

カナン「歌うこと」

07 ご趣味は？

ナツ「料理！」

アマネ「人間観察」

リョウ「最近サーフィン。この間まで登山趣味だったな。あ、キャンプにもいきてえ」

ナツ「相変わらず、アウトドアだなあ。」

カナン「俺は特にねえ。」

アマネ「(クスツ)カナン君は仮面Xマンでしょ？」

カナン「あ、確かに」

08 将来の夢など

ナツ「えー、料理本出すこと？」

アマネ「特にないかもね」

リョウ「世界一周かな。ヒッチハイクで」

カナン「・・・」

ナツ「カナン？」

カナン「りよ、りよこう、とか」

ナツ「そっか(ニヤニヤ)」

カナン「(うぜえ)」

09 好きな言葉とかある？

ナツ「愛！」

カナン「愛？」

アマネ「愛・・・？」

リヨウ「じゃあ愛」

10 好きな動物は？

ナツ「えつとね、ハムスター？小さくて可愛い！」

アマネ「猫かなあ。」

リヨウ「トラとか熊とか、でけえの。」

カナン「犬、かな」

11 好きな色

ナツ「ピンク！」

アマネ「濃い青」

リヨウ「緑かな」

カナン「・・・海の色」

12 好きな料理

ナツ「やっぱり日本人はご飯に味噌汁鮭の3点セットでしょ！」

アマネ「ナツの作った料理は絶品だねえ」

リヨウ「たしかになー。最近食べる手料理には感動してる」

カナン「・・・ああ。」

13 好きな異性のタイプ

ナツ「癒し系？」

アマネ「可愛い子がいいね」

リヨウ「いつも一生懸命頑張ってるやつかな」

カナン「俺を成長させてくれるやつ」

14 好きな同性のタイプ

ナツ「んー、全てにおいて信頼できる人」

アマネ「可愛い子」

リヨウ「器のでかい人かな」

カナン「俺を成長させてくれるやつ」

15 座右の銘は？

ナツ「一日一善？」

アマネ「一日一曲？」

リヨウ「一日一遊？」

カナン「・・・」

16 暇なときなにしてる？

ナツ「料理かな」

アマネ「DVDを見てるよ」

リヨウ「外に出る。」

カナン「電話」

17 旅行とか好き？

ナツ「行きたいな〜温泉旅行とか！」

アマネ「いいねえ」

リヨウ「待てよ、温泉地の近くには登山できる場所あるし登山いき
てえよ」

カナン「登山は（双子の年齢的に）無理だ。せめてハイキングでき
る場所で。」

ナツ「じゃあ総合すると、登山とかハイキングできる場所が近くに
ある温泉地！」

18 癒されることって何？

ナツ「最近子供と触れ合うことがあってね〜！もう可愛いなのなんの
！癒し」

アマネ「右に同じ」

リヨウ「確かにあいつらと一緒にいると元気出るな」

カナン「そうだな」

19 一緒にいて落ち着く人はいる？

ナツ「いる！」

アマネ「いるね。」

リヨウ「そうだな〜どうだろうなあ」

カナン「いる」

20 ぶっちゃけその人は恋人です！？

ナツ「どうなんだろうね？」

アマネ「さあ？」
リヨウ「俺は違うな」
カナン「ちげえ」
21 コンプレックスとかあったりなんかしちゃったりする？
ナツ「コンプレックスをプラスと考えてるよん」
アマネ「特にないかな？」
リヨウ「ないな」
カナン「ある」
22 それを解消するために何か努力はしてる？
ナツ「プラスに考えてるから解消させる気はないかな」
カナン「無理」
23 じゃあ逆に自慢できることは？
ナツ「可愛い顔！」
カナン「ねえ」
24 人生で一番嬉しかったことは何？
ナツ「んー初恋が叶った時とか嬉しかったかな？青春時代！」
アマネ「右に同じ」
リヨウ「ヒマラヤ登山に成功した時」
カナン「愛を知った時」
25 人生で一番驚いたことは？
ナツ「リヨウがヒマラヤ登山成功したって聞いたとき」
アマネ「今の状況かな？」
リヨウ「じゃ俺はナツが一度ショートカットにした時。マジ誰かと思っただ」
カナン「子供の感受性豊かなところ」

「半分しゅりょー！残りは次回ということぞー！」

「つかれたねえ。」

「いろいろ突っ込みどころ満載だとは思っけど、まあそれぞれ想像してくれ」

「・・・」

「ではまた来週〜！ぐっばーい！」

.....
.....
.....

今回お借りした質問はこちらです。ありがとうございました！

「Water Future」
http://waterfuture.finito-web.com/orichara50.html

らじくら！ 後編 B Lあり(前書き)

少しだけB Lはいます

らじくら！ 後編 BLあり

「みなさんちゃおちゃおー 今日もラジクラ！の時間がやってきましたー！いえーい！ナツルです！」

「アマネだよ」

「リヨウです」

「カナンだ」

「毎週anfangと一緒にanfangのことを知っていろいろと始まったこの番組！先週に引き続き4人でお送りします！」

「はい」

「さて、返事をしなかったカナン君、ハイキングの話を聞こうじゃないか！」

「は？」

「そうだねえ。ハイキング行ってどうだったの？初めてでしょ？」

「まあ、」

「くつばあさんと一緒に和んだんだろ？」

「・・・」

「おおっこわい」

「で？どうだったのさ！」

「・・・おにぎりがおいしかった」

「は？」

「一番上まで行って弁当食って、その時おにぎりくって、おいしかった。」

「よ、よかったね」

「もっとねえのかよ！一番上まで上った達成感とか！」

「ああ、それはあいつらが存分に表現してくれたから別に」

「そ、そうか」

「よし、じゃ、じゃあ残り質問いこうか」

- 26 人生で一番楽しかったこと
ナツ「んーライブ？」
アマネ「確かに毎回楽しいよね」
リヨウ「ライブのあとの打ち上げ」
カナン「この間のライブのファイナル」
27 人生で一番怖かったこと
ナツ「お化け見たこと！！」
アマネ「へえ、見たの？」
ナツ「前金縛りにあって上見たらひいひい！！！！思い出しただけでもトラウマ！！」
アマネ「（それって・・・）」
リヨウ「んー特にねえかもな」
カナン「別にない」
28 人生で一番辛かったこと
ナツ「なんだろ？」
アマネ「特にないんじゃない？」
リヨウ「ねえな」
カナン「特に」
29 外向的？内向的？
ナツ「んー内向的？」
アマネ「内向的」
リヨウ「外向的」
カナン「内向的」
30 道に1000万（日本円で）が落ちてました。どうします？
ナツ「やったー！と言いたところだけど、おまわりさんに渡す
！」

ナツ「あやまるっ!!!謝りとおす!!!」

アマネ「俺は謝れない人だからそうならないように努力する」

リヨウ「謝れるやつとそうじゃねえやついるからなあまあよりけり」
カナン「別にどうもしねえ」

35 嘘はつけるタイプ？

ナツ「むっ無理!!!」

アマネ「まあそれなりには」

リヨウ「ある程度だな。大人だし」

カナン「まあ、」

36 もしかしてその嘘はついてもすぐバレちゃったりしない？

ナツ「すぐばれちゃうんだよねえ。なんでだろうね？」

アマネ「クスツ、ナツのはすぐ分かるよ。」

ナツ「えーっほんと!？」

リヨウ「ナツはなあ、素直だからなあ」

カナン「そうだな」

ナツ「ぶー!!!」

アマネ「あ、他の3人は基本的にはれないかな」

37 何か癖ある？

ナツ「ギター持ってて弾いてない時ピックをずっとどこかにぶつけてる。のってる時はずっと動いていたいから」

アマネ「前髪の触ることかな？」

リヨウ「座つてると机を指で叩いてる」

カナン「サングラス触ること」

38 誰かに何か言いたいことたまってる？

ナツ「まあね(カナンをちらっ)」

カナン「なんだよ」

ナツ「べっつにー!」

リヨウ「まあいろいろあるよな」

アマネ「そうだねえ。」

39 あるって答えたそのあなた! じゃあこの穴に向かって

思う存分叫んでください!!!

ナツ「えっいいの!?じゃあこっそり・・・(スタジオの外の穴) 香南早くななちゃんとかっつけー!!!!!!!」

リヨウ「じゃあ次俺だな(外へ出る) ななみー!!!!早く幸せになれー!!!社長!!!!いい加減休みくれ!!!!」

アマネ「最後は俺かな?(外へ出る) ナツ、大好きだよ」

40 ……酸素マスクいる?

ナツ「ゼーはーゼーはーくだ・・さい・・・」

リヨウ「俺はいいかな」

アマネ「俺も要らない」

41 あなたにとつて一番大事なものは?

ナツ「ノーコメント」(アマネをチラッと見る)

アマネ「ノーコメント」(ナツの手を握る)

リヨウ「ない。寂しいけどな」

カナン「ノーコメント」

42 自分といたらコレ! みたいなのある?

ナツ「ギター?」

アマネ「ベース?」

リヨウ「ドラム?」

カナン「歌」

43 崇拜してる人とかいる?

「「「「「いない」」」」」

44 どうしよう! 財布を掏られた!!

ナツ「まずキャッシュを止めてもらうための電話、それから銀行にも電話・・・大変だね」

アマネ「そうだね。なくさないようにしないとねえ」

リヨウ「財布をするよりもっと効率いい金の稼ぎ方あると思っけどな」

カナン「・・・」

45 コレだけは誰にも負けないものってある?

ナツ「料理？」
アマネ「なんだろう？」
リヨウ「ドラム叩く体力かなあ」
カナン「愛情」
46 こいつには敵わないっていう人いる？
ナツ「メンバー」
アマネ「そうだね」
リヨウ「両親かな」
カナン「まあいる」
47 全部答えてきたね？じゃあこのノリで普段なら言えないような秘密トークをお願いします！！
ナツ「えー？なんだろう？」
アマネ「好きだよとか？」
リヨウ「子持ちでーすとか？」
ナツ「それ嘘じゃん（笑）」
48 ぶっちゃけ作品内での自分の立場ってどうよ？
ナツ「割といいポジションだと思っけど？」
アマネ「そうだねえ。」
リヨウ「結構でるしな」
カナン「別に」
49 ここぞとばかりに生みの親になんでも言っちゃえ！
ナツ「可愛くしてね？」
アマネ「はやく最終回終わらせてね？」
リヨウ「俺の旅行伝説話作ってくれ」
カナン「俺はいいから幸せにしてくれ」
50 ここまで読んでくれた方に何か。
ナツ「と云うことで以上かな？ありがとうね！あとから聞き直したらアホらしいんだろうね・・・」
アマネ「そうだねえ。まあ質問だしいいんじゃない？」
リヨウ「そうだな」

カナン「・・・」

「意外に疲れたな・・・」

「あまり4人で喋るなんてしないからねえ」

「・・・」

「（げっ香南のパワーゲージが！！！！）と言うわけでラジクラ！また来週！ぐっばーい！」

.....

今回お借りした質問はこちらです。ありがとうございました！

「Water Future」
http://waterfuture.finito-web.com/origchara50.html

ゆめ

ふと眼を開ける。

いない。彼女がいない。

よく前を見ると後ろの方で彼女が笑っている。

優しい光。

俺もそこへ行っていていいのだろうか？

必死に走るが追いつかない。

彼女は徐々に遠のいていく。

待って、待ってくれ

俺を、置いていかないでくれ。

「……なん！香南！！！」

ハッと目を開ける。目の前には夏流がいた。

「大丈夫？寝てたよ。寝るなら仮眠室行って。」

ぼっとした頭で周りを見渡す。

そう、今はアルバム作製の途中だった。

「…七海、は？」

ふとつぶやいた言葉にマグカップに入れたお茶を持ってきてくれた雅が笑う。

「何言ってるの。七海ちゃんは今日も学校でしょう?」

ありがとうとお礼をいいお茶を飲む。

しかし、背中に流れる冷や汗が止まらなかった。

「・・・電話してくる。」

「おいっ次お前のレコーディング、って香南!」

燎の言葉も気にせず香南は部屋を出た。

急いで短縮キーを押す。今は昼休みのはず、出てくれるに違いない。
変な確信を持ちながらそれでも心は急ぎながら電話をする。

はやく、はやく、

こういう時に限って時間は俺の空間を遅くする。

早く出て欲しい。

逃げないで、俺は、

ぷつと音がした後、ざわざわとして音が聞こえてくる。

「もしもし？香南さん？」

ほら、心が一瞬のうちに温まった。
僕は君に近付けた。

ゆめ（後書き）

何を書きたかったのかよくわかりません（笑）
明日、嫌だと思ったら消します。

そつだ、カラオケへ行こう！（前書き）

七海たち22歳、香南、27歳、双子ちゃんたち10歳の話

そっか、カラオケへ行こう！

「ななちゃん、あのね、カラオケ行きたい、です、」

皆で晩ご飯を食べている最中突然申し出たのは瑠唯だった。

「どうしたの？突然。」

今日の夕食ジャガイモコロツケを二つに割りながら七海が尋ねる。

「なんかね、やっくんがね、家族でカラオケに行っただって！
んでじまんしてきたらしいんだ。」

隣から美羽が口を出す。

やっくんとは瑠唯のクラスメイトで人気の男子だった。

瑠唯に何を嫉妬しているのかいつも自慢ばかりしてくる子だった。

自分のことで自慢し来るならいざ知らず、家族の事を出して自慢してくることに對し、瑠唯はとてつもないショックを受けた。

放課後には美羽にまで相談するほどだった。

「そっか…」

「瑠唯は、行きたいのか？」

悩んでいる様子だった七海の横から香南が口を出す。

その言葉に瑠唯はコクリと頷く。

「行き、たい。けど…」

時計を見ると7時だった。

「七海、2時間だけ、行ってくるか。」

「良いんですか？」

9時から再びスタジオ入りだったはずだ。

カラオケなんか行ってしまふとのどの調子に支障が出てしまつかもしれない。

七海が心配そうに尋ねると香南は笑う。

「大丈夫。よし、ちゃんと噛んでけど早くご飯終わらせるぞ。」

双子は「いい!と嬉しそうに言う」と頑張って茶碗をからにし始めた。

「4人。2時間で。」

「はっ・・・はいっ・・・!!!!」

突然に美声に驚いた店員だったがすぐさま席を用意してくれた。

部屋の中へ入るとタバコ臭いのは残念だったがとてもきれいだった。

しかし、来たものの、何をどうしたらいいのか分からず七海と双子は立ち往生したままだった。

「ここ、座って。この機械で歌いたい曲を検索するんだ。」

ぴびぴこと操作する香南を七海たちはじっと見る。

ぴびぴつという画面に『13番目の祈り』と表示されその前奏が流れてくる。

「すっ凄いです!!」

尊敬のまなざしで七海は香南を見ていると双子にマイクを渡す。

「お前ら、歌え。」

「これで?」

「ああ。このボタンを押すんだ。」

「あー」

瑠唯が声を出すとマイク越しに声が聞こえてきた。

「すごーい!」

「ななちゃん、これ、マイク!」

「凄いいえ!!ほら!!二人とも始まったよ!」

そして曲を歌って行く。初めてマイク越しに歌うと言うこともあり

とても緊張しながら歌っているのがわかった。
曲を聞いていると横から機会を渡される。

「次、七海。」

「えっ私ですか?!」

「七海の、聞きたい。」

必殺笑顔でおねだりに勝てるはずもなくうつうつと照れながら検索を開始する。

そういえばと香南の方を見る。

「香南さん、カラオケに来たことがあるんですか?」

香南は一瞬キョトンとするがアと説明する。

「メンバーとな。突然なつが自分たちの曲をカラオケで100点取りたいって言い始めて無理矢理行かされた。」

「結局取れたんですか…?」

「いいや。俺もあんまりやる気なかったし、皆歌えるような声域じゃなかったから結局俺の92点で終わり。」

「そうなんですか。」

その顔はとても残念そうだった。しかし顔をあげるととてもキラキラ目をしていた。

「香南さん!今日は100点目指してみましょっ!」

よし、と張り切って検索をする。

双子の『13番目の祈り』の後香南に採点画面に早速七海が歌い始める。

「日向七海、歌いますっ!」

歌い始めた曲は『White Kiss』だった。

しかし、

「じっじゅっ、いってん…?!」

何せ七海は下手だった。

後ろで男性陣が微笑ましく見ていた。

シヨックを受けているところに『Meine Liebe』の前奏が流れてきた。

「日向、香南、歌います。」

圧倒的歌唱力に一同呆然。本人が歌っているのだから当たり前だが…点数は、98点。その点数に香南が眉をひそめる。

「この機械、壊れてんじゃねえのか…？」

香南がイライラし始めた横で双子が喧嘩をしていた。

「次俺が歌う！！」

「ぼっ僕！！」

「こらっ二人ともじゃんけん！」

「はーい」

じゃんけんで次は瑠唯の番になった。

選んだ曲は『backbone in the earth』

瑠唯は七海と違ってとても歌がうまかった。

点数は80点。小学生ながらにいい点数だった。

「瑠唯はうまいな。」

曲が終わった瑠唯の頭を撫でる。

「あ、ありがとう」

瑠唯は照れながらも撫でてもらった頭を撫でていた。

「じゃ次俺ね！」

そして『angel wings』を歌い始める。

聞きながらも話を続ける。

「瑠唯が一番歌覚えるの早いんです。羨ましいです。このまま歌手になりたいって言ったらどうしようかと思うぐらいですよ。」

八八と七海が笑うと香南はなんとも言えない顔をしていた。

「俺としては賛成できないけどな。」

「？駄目、ですか？」

「いや、あの職業になることが反対なんだ。もっと、瑠唯ならいい

ものになれるよ。」

「は…い。」

「まあその前に瑠唯はなりたいて思わないと思うけどな。」
微笑みながら美羽の方へ向く。七海も美羽の曲を聞く。
美羽は七海よりでどちらかと言うと下手だった。

しかし子供パワーなのか高い声も出せフオローのしよつがあつた。
点数は70点

「ななちゃんに勝つた！やった！」

嬉しそうにこちらに向かってくる。

「負けちゃった〜。くっそー、今度は十八番歌っちゃう！」

そして皆次々と入れていくが100点を取れなかった。

残り10分ほどになった頃、香南が最後にと曲を入れる。
全員かなり体力を消耗していた。

「ぜーはーぜーはー…これに…全てを…かける。」

「香南さん！…！」

「…にいちちゃん！…！」

3人の全身から出る期待にこたえるよう香南は立ちあがった。

流れ始めた曲は『幻・seventh ocean』

なるべく間違えないように、ライブではなくCD制作時を思い出して歌う。

ゆっくり、やさしく。

歌い終えた後にはライブ一本終わった後ほどの疲れがどつと沸いてきた。

そして点数は…

「やった・・・」

「やったー！！！！」

100点満点だった。

4人は大喜び、はしゃぐだけはしゃぎ疲れ果てた体でカラオケを出る。

そして家に雅が迎えに来たのを見てそう言えばこの後仕事だったと思いだす香南だった。

そつだ、カラオケへ行こう！（後書き）

カラオケへ行く話でした。

そつだ、コンビニへ行くじゅうー！(前書き)

本編一年後の夏の話。

そうだ、コンビニへ行くわー！

夏の暑い中、日向家ではお風呂上がりにはアイスを食べるのが恒例になっている。

今日もお風呂からあがり、ドライヤーをかけ気分は上々。さて、食べようと冷凍庫を開けると、

アイスが一つもなかった。

「あれ…？」

「アイスがない！！」

「アイス…」

3人で覗き一生懸命探すがないものはなかった。

そして必死に昨日を思い出す。

確か昨日は香南さんもいて双子を風呂に入れてもらった。そしてその後私が一人で入って…さっぱりした後にはアイスを食べ

あ、

「ごめん、昨日私が食べたので最後だったの忘れてた…」
「えー！」

双子の不満爆発。

今食べれると思っていたものが食べられない。

ごめんね、私がちやんと用意しておかないから。

それがどんなにシヨックなことか、もちろん今実感していた。
時計を見ると8時。

「…コンビニ行って買ってこようか？」

歩いて5分ぐらいの場所にコンビニがあった。

そこならきつと好きなアイスが選べるはず。

「コンビニ!？」

「いく、の?!」

途端に双子の目がきらきらし始める。

これは嫌な予感だ。

「絶対、他のものは買わないからね？」

人差し指を立てながら忠告するが聞いているのか聞いていないのか
双子はのんきにはーいと返事するだけだった。

外に出れるようなジャージに着替えさせて行こうと言う時に玄關の力
ギが開く音がした。

「あ、にーちゃんだ！」

「にーちゃん！」

ばたばたばたと走り出していく。廊下からはうおつと言う声と共に
おかえりなさい!と言う双子の声が聞こえてくる。

急いで行くと、双子たちと戯れていた香南さんが不思議そうな顔を
していた。

「おかえりなさい！」

「ああ、ただいま。どこか行くのか？」

「うんあのね!アイスかいにいくの!」

「なくなつたの。だからかいにいくの」

途端に香南さんが眉をひそめる。

「今からか？女子供たちだけで危ないだろ。」

「うっ、けど近くのコンビニですし。」

おもわず唇を尖らせ反論する。

5分ですよ？いいじゃないですか、と心の中で呟く。

「その間に何かあつたらどうするんだ。」

「さ、さげぶとか…？」

「・・・頼むからこれからは俺がいる時に行くようにしてくれ。」
荷物を廊下の端に置くと玄関先に置いていたサングラスを再度かける。

途端に自分の顔が先ほどの暗い顔から明るい笑顔に戻るのがわかる。

「ほら、早くいくぞ。」

「はっはい！」

こんな時、小さな幸せを感じる。

びんぽーん

「いらっしゃいませー」

店員のやる気のない声が聞こえてくる。

そして中へ入ると一斉に双子は駆け出す。

「こらっ！二人とも！！駄目でしょ！アイス見るよアイス。」

「はーい」

七海たちを暮らして以来毎日新しい発見をするようになった。
それが今回のような光景だ。

双子が元気に駆け回る。親代わりの七海が子供を叱る。
自分の子供時代にはなかった当たり前の光景が今自分の前で繰り広げられている。

そこにはあたたかさがあり、愛がある。

一緒にいて幸せだ。何度思ったことが。

七海を見るととても真剣にアイスを選んでいた。

きつと高いものを奮発して買うか、安いもので我慢するか彼女の中で葛藤が行われているのだろう。

クスツと思わず笑みを浮かべると横からクイクイと服を引っ張られる。

みると双子だった。

「あのね、おにーちゃん、こっちにいいものがあるの。」

「あるの」

「?なんだ?」

一緒についていくとお菓子売り場だった。

「あのね、これすっごくおいしそうなの!」

「こっちもね、このあいだたべたときおいしかった」

指されたものを見てみると駄菓子屋で売っているような安いお菓子だった。

「買うか?」

とたんに嬉しそうな笑顔を見せる。

この笑顔がどれだけ俺を幸せにさせるのか、二人は知らないだろう。
かごを取ってきて4つずつ入れる。

そして他のものを二人は紹介してくれる。

最近のお菓子はいろいろあるんだなと感心してしまう。

二人が紹介してくれるものを次々にかごに入れていく。

そして次は小さなおもちゃ売り場だった。

「これかっこいいー!」

「かつこいいね。」

よくわからないがキャラクターものだった。

子供たちは次から次へと新しいキャラクターを好きになるなど思いながら双子の説明を聞きながら聞く。

そして最後の買って？と言わんばかりの上目遣い。

ついつい笑顔になってしまう。

「よし、ならこのかごにいれ」

「いれません」

言葉を重ねてきたのはアイスを決めた七海だった。

仁王立ちをしており、いつもより何か怖くないか…？

七海はちらつとかごを見ると双子たちを睨む。

「美羽くん、瑠唯くん、私コンビニに行く前なんて言いましたか？」

「う、」

「ほかのものはかわない」

双子たちが恐る恐る答える。

「瑠唯くん正解です。」

正解と言いつつも顔が全く直っていない。

「かごの中のもの、ちゃんと戻してきなさい」

「「ええー！！！」」

「はやくー！！」

二人がしょぼんと悲しそうな顔をしながら棚に商品を戻していく。思わず双子の立場になり七海に言及してしまう。

「おい、欲しいって言ってるんだから、安もんだし買ってやっても…」

途端に怒りの矛先は俺の方に向かってきた。

「香南さんも！なんではいはいって買っちゃうんですか！駄目です！子供は何でも欲しがります！簡単に買ってあげたら駄目なんですよ！」

「けど…」

「いいですね！！」

「…ハイ」

それ以後双子と俺だけで買い物に行く時には使用金額の制限がなされた。

うちの財務大臣は主婦のおばさんながらお金にはとても厳しいと言っことを実感させられた。

そつだ、コンビニエ行くじー！（後書き）

コンビニエ行く話です。

ただいま(前書き)

本編終わる直前の2月の話

ただいま

怖い気持ちは

その言葉に

救われるのだろう

clarity love
ただいま

「今日はここまでだな。」
雅が時計を確認しながら言う。

まだ4時半だったがいっつもより順調に進み早く終わることとなった。
「今日はゆっくり休んでくれ。また明日からもスケジュール詰まってるし。」

「そうさせてもらおう。雅さんもゆっくり休んでくれ。」

燎が雅を気遣う。こついうところがリーダーである所以だなと雅は改めて思った。

「うん。」

「じゃあ今日は久々に夜ご飯つくっちゃおうかなー」

「うーん、今日は和食がいいなあ。」

「待てよ。肉だろ？肉。体力つけねーといけないんだから。」

「えー！燎もくんの!？」

「行っちゃ悪いかよ??? いいじゃねーか香南の邪魔はできねえし。」
にやりと燎は笑う。

その顔に香南は眉をひそめにらむ。

「こら。いじめていないで帰るぞ。」

「……はい……」

元気があるのかないのかわからない声でメンバーは返事をした。

「じゃあお疲れ。明日朝8時だからな」

「ああ」

「お疲れさまー また明日ね。」

「ああ」

「ちゃんと休むんだぞ?」

「わかってる」

「ななちゃんどっゆっくり」

「・・・」

ワゴン車の戸を閉めると玄関へ向かった。

そしてチャイムを鳴らすが一向に返事が返ってこなかった。
時計を見るとまだ5時前だった。

そうか、双子を迎えに行つてそのまま買い物へ行っているんだ。

自分がいつも夕方にいなかったため忘れていた。

しかしちゃんと合鍵はもらっているので鍵を捜し鍵穴に嵌めようとする。

これを嵌めれば家に入ることが出来る。

ごく当たり前のことなのに、鍵穴に嵌めるところで手がなかなか動いてくれなかった。

もし嵌らなかつたら？

俺が最初に入ってもいいのか？

俺は歓迎されているのか？

「うーし！ななちゃうし！」

「”し”だね。しまうま。次美羽だよ。」

「ままごと！溜唯”と”！」

「とまと！」

3人は仲良くしりとりをしながら帰っていた。

もう少しで家だというところで家の前に黒い物体があるのに気が付いた。

「あれ？」

「にーちゃん！」

「にーちゃだ！！！！」

最初不審者だと思ったが香南の髪の色で判断したのか双子が勢い良く走り出した。

座り込んで顔を隠していた香南は双子の声にぱっと顔を上げる。

双子と七海の顔を見てほっとした笑顔を見せた。

「おかりなさい！！今日は早かったですね」

「ああ。今日は順調に取れたから」

双子をなでながら香南が答える。

「えっと、かぎ忘れてたんですか？電話していただければ急いで帰ってきましたのに」

「いや、もってるんだけど、その・・・」

うつむく香南に七海はますます不思議に思う。

恥ずかしそうにけれども苦しそうに香南は言葉を続けた。

「こわく、て」

「え？」

「一人でこの家には入れるのか、怖くて・・・そしたら鍵差し込めなくて・・・わりい。かつこ悪いな」

そっぴいながら苦しそうに微笑む香南に七海まで泣きそうになる。

急いで目をこすると香南に手を取り玄関へ導く。

「鍵、一緒にさしましょう！」

一緒に鍵を差し込むと鍵はすんなりと鍵穴に嵌った。

カチャリという音がすると玄関の戸は開く。

七海は一足先に入ると双子を呼び寄せ笑顔で香南のほうを向く。

「香南さん！おかえりなさい！」

「にーちゃー！おかえりなさい！」

「おかえり、なさい」

香南は目を見開き口を手で押さえる。

そっぴでもしないと今の気持ちがあふれ出しそうだった。

「な、なみ・・・」

香南の声に七海はいつそう笑顔を向ける。

「香南さん、こういうときは”ただいま”ですよ？」

「にーちゃー！ただいま！！」「」

この気持ちをなんとなく言ったらいいのだろうか？

暖かくて、眩しくて、俺にはもっぴないけど、ずっと求めていたもの

ここにあったんだ。

こんな遠くて近い場所に

香南は口端を緩めると笑顔になる。

「ただ、いま」

ほら、愛が大きくなった。

ただいま（後書き）

2週間ぶりに書きました（笑

K i s s t h e g i r l ! 0 1

B L 有 (前 書 き)

本編終わって半年後ぐらいです。

K i s s t h e g i r l ! 0 1 B L 有

君の心を

あの子は待ってる

あの子のルージュは

君のものだから

k i s s t h e g i r l ! 0 1

アルバムも無事成功し、それから出したシングルも順調な売れ行きだった。

安心するのもつかの間スタジオでは次シングルを出そうとミーティ

ングが行われていた。

「次は化粧品のコムで使いたいらしいんだ。」

雅が次のシングルの趣旨を説明する。

それを聞いていた夏流が指摘する。

「ちょっと待ってよ、僕たちライブでは使うけど普段化粧品なんか使わないよ？どうするのさ。」

「だからね、要望はただ一つだけ。『甘酸っぱい恋心』」

クスリと笑いながら雅が説明をする。それにメンバーが同一の意見を出す。

「じゃあ、夏流だな。」

「だね。」

「よろしく！」

皆の意見に夏流は反論する。

「ちょっと待ってよ、僕書いてもいいよ？けど、甘酸っぱいって言うんだったら…今新婚はやはやの香南の方がいいんじゃない？」

「…俺？」

香南が頭の中ではてなを出す。

「だって甘酸っぱいんだよ？香南そのまんまじゃん！」

「何言ってるんだよ」

顔を赤く染めながら香南が反論する。

「そうだねえ。そう考えたら香南くんが書いた方がいいかもしれないねえ。」

「香南にしようぜ。それか二人共同でも良い。」

「…わかった。」

しびしび香南が頷く。

「まー甘酸っぱいと言えば、初めてのキス、だよね」
周が目を輝かせながら言う。

夏流は顔を真っ赤にさせ周の方を向く。

「何言つてんだよ！恥ずかしくて書けるわけないだろ！！」

「ふーん、そんなによかつたの？」

「ばっバカ！！！」

「おいおい、二人とも落ち着け。…って香南どうしたんだよ。」

香南の方を向くととても沈んでいた。

「・・・」

「香南：？」

「大丈夫かい？」

最近香南は体調を崩すことはなくなつたが、考え込むことが多々あった。

何を聞いても別にとしか答えてくれず、そのままとなっていたが、何か関係しているのだろうかと夏流は香南に尋ねた。

「香南、何かあつたの？ななちゃんと喧嘩した？」

「いや、その、」

再び考え込むようになり下につつまぐ。

「キス、してない。」

「……は？」

皆が呆然としているのがさらに恥ずかしいのかこちらを睨みつけるように見る。

「…してねえんだよ。俺ら。」

「ほっほんとにいいい！？」

夏流はびっくりしすぎて叫ぶ。

「なるほどねえ。」

「まあ七海は自然培養っばいからなあ。手出しすんの難しいだろう

な。」

「そう言ういい方はやめる。」

夏流が真っ赤になってるのを見て燎はにやりとする。

「香南お前、それで悩んでたんだろ？」

「!？」

香南は驚くように燎の方を向く。

確信めいたようにさらに笑みを深める。

「男だもんな。わからなくもない。そうか。お前も、そんな年だもんな。」

「うつせえぞ!!!燎!!!」

顔を真っ赤にしながら叫ぶ香南は怖くもなんともなかった。

「うーん、よし、じゃあ僕曲作る!」

「・・・え？」

香南が驚くように夏流の方を向く。

「とっておきの甘酸っぱいソング作るから、香南絶対歌ってよ?」
にっこりと笑顔を向けられるとやな予感しかしない香南だった。

「ええええええ!?!キスもしてないの!?!」

七海の家で琴乃が遊びに来ていた。

七海は恥ずかしがりながらコクリと頷く。

「香南さん、私の事好きじゃないのかなあ...?」

「いやあ、それは100%ないと思うけど...」

「じゃあなんでしてくれないんだろ?」

「うーん、それはやっぱり二人っきりの時間がないとか要は雰囲気作り？」

琴乃がアドバイスをくれる様子に七海は姿勢を正す。

「はい。」

「こうなんつていうのかな？…貴重な二人っきりの時間に上目使いをするとか。」

「上目使い？」

「そう。」

七海は不思議に思いながら様々なキスレクチャーをしてもらう。

それから二人の時間ができることがなかなかなかった。

香南がシングル作りに本格的に取り組み始めたことが一つの原因だった。

香南が帰ってきてきても双子がいて、双子も香南に会いたがっているためずっと一緒にいる。

これではなかなか時間が取れなかった。

しかし七海にはこれが都合だと思っていた。

なぜなら香南の前で上目使いがとても大変なことに気付いたのだ。

二人でご飯の食器を片づけていても意識をしすぎてかやけによそよそしくなってしまう。

とてつもない恥ずかしさを感じるのだった。

香南も香南でそのよそよそしさに気づいていた。

そして作っている曲が曲なため素直に七海の方を向けずよそよそし

くなってしまう。

事態は思わぬマイナス方向へ向かっているのだった。

K i s s t h e g i r l ! 0 1

B L 有 (後書き)

続きます (笑)

K i s s t h e g i r l ! 0 2 B L 有

あの赤い果实のもとへ

きつとあの子も待っている

僕がそうだったように

あのルージュは

君を待ってるんだよ

「うーん、」

「駄目だねえ。」

「あいつ、まだやってねえな。」

メンバーの三人が香南を見る。

今日もレコーディングだったためスタジオにいる。

しかし、全く進まない。

香南が思い悩んでいるのだ。

キスのことを意識して以来七海ともあまり会話をしていない。

自分も以前のように七海と話をする自信がない。

それに…

香南は顔を真っ赤にすると俯いてしまう。

「こりゃ駄目だ。」

「夏流はちゃんと仕事をしたのにねえ。甘酸っぱいキスのう・た」
周が夏流の肩を引き寄せ耳元で言うと夏流はすぐさま引き離し耳を
手で覆う。

「周ッ!!」
「ふふっけど、香南くん締め切りまで近くなるのに…ねえ。」
「うーんこりゃあれだな!奥の手召集!!」
燎が携帯を開くとあるところへ電話をかけた。

「…あのう。」

「いや、緊張しなくてもいいんだよ。リラックスして。」

「あ、もしかして出したお茶嫌い?ジュースもあるよ?」

「お腹すいてんのか?だったらちよっとお菓子とってくる」

「いや、そう言うことではなくてですね…」

電話した夜、琴乃は独り焦っていた。

目の前には大好きな anfang の 3 人。

以前連絡先を交換したがまさかかかってくる時がこようとは思ってもよらなかった。

呼ばれたスタジオに雅さんが連れていってくれ来た先には 3 人のメンバー。驚かないわけがなかった。

「用事とは…」

「あー、あのね、香南にななちゃんとのファーストキスさせちゃいましょう企画が今上がってていろいろ香南に言ってるんだけど、なかなか香南が実行に移してくれないから困ってて…どうしたらいいと思う?」

どうしたらいいと思うと言われても…と琴乃が悩む。

「それ実は七海に相談されていたんですよ。」

「は?七海が?」

なんで？と燎が尋ねる。

「香南さんがキスをしてくれないから私のこと嫌いになったのかなって。絶対そう言うことないからって七海にこうしたら明日らってアドバイスしたんです。けどこれだけ二人がいるいろやるから、あの意味逆効果かもしれないねえ……」

「なるほどねえ……」

ふむふむと周が相槌をうつ。

「うーん難しい展開になってきましたねえ……」

「二人がキスするの待ってたらだめなんですか？」

「それが今のレコーディングに少なからず影響しちゃってるんだよねえ……」

「え」

琴乃が目を見開く。

「駄目じゃないですか！！！新曲待っていたのに！！！！こうしちゃいられない！！あんな惚気の二人に任せてられない！！」

琴乃が近くにあったホワイトボードに作戦名を書く。

『使うものは使っとけ作戦』

どうということ？とメンバー3人は首をかしげた。

2日後、まだレコーディングは進んでいなかった。

香南は夕方頃に埒が明かないからとりあえず家に帰れとメンバーにスタジオを追い出された。

原因がわかってる香南はため息をつくがどうにもならなかった。

「ただ、いま……」

ドアを開けながら言うとりビングから双子が顔を出してきた。

「おかえりー!!!」

ばたばたと玄関へ向かってくる双子に笑顔がこぼれる。

するとリビングからもう一人顔を出している琴乃に気がつく。

「香南さんおかえりー!」

「・・・柳田琴乃?」

「きよ、今日ことちゃんもいつしよにごはん!」

「ななちゃん、い、今作ってる!」

「?」

言い方に違和感を持ったが、気にしても仕方がないと中へ入る。

「香南さんおかりなさい」

七海がリビングに夕御飯を運びながら笑顔で言う。

「ああ、ただいま。」

「すみません。琴乃が突然一緒にご飯食べたいと言うので...もうすぐ準備終わりますから。美羽と瑠唯手伝って」

「「はい」」

夕御飯の支度を食べ、5人でご飯を食べ始める。

七海と琴乃が笑いながら話をするのを双子が横から口を出し静かに香南が聞いていた。

無事ご飯も食べ終わり食器をシンクへ持って行く。

香南はシンクに食器を置くと後片付けは自分でしようとスポンジを持ち洗剤をつける。

「あ、私がやります!」

七海が食器をシンクに置きながら促すが香南が首を振る。

「いつもいないし今日ぐらい俺にやらせてくれ。」

「けれど...!」

二人は目があう。しかし二人の距離の近さにお互い目が真っ赤になる。

離れないと思っていると突然後ろから声がかかる。

「双子！！行け！！！！」

「ななちゃん！！！！」

「ごめんなさい！！」

互いの足もとには瑠唯と美羽がいた。

そしてお互いの後ろから瑠唯と美羽がお互いを前に押しあつ。

あ、

思っているうちに唇が重なり合った。

七海がへなへなと崩れそうになるのを香南がスポンジの持っていない手で支える。

「大丈夫!?!」

「ななちゃん?」

「だ、大丈夫」

苦笑いしながら双子に応える。

香南は電話をし始めている琴乃の方を睨んでいた。

「おい、柳田琴乃。どういうことだ…」

すると琴乃がにやりとしながら電話を音を周りに聞こえるようにする。

「双子ちゃんありがとう!そしてお疲れ!!!」

「その声はナツ!!!」

かみつくように香南が言う。

「いや、香南くんが悪いんだよ?どうだった?」

「これからはまわりが何をしないででもできるようになれよな。」

「てめえら…」

香南が七海をそつと離し、琴乃から携帯を奪う。

そんな横で七海はわけがわからないとはてなを浮かべていた。

「琴乃…?」

「ごめんね。双子もありがとう。」

「んーん」

「ななちゃんとにーちゃんきすできた?」

「へ!?!」

七海がびっくりするように双子を見る。

「ことちゃんが心配してた。ななちゃんとにーちゃんきすしたいんでしょ?」

「僕たちがきょうりよくしたら、できるんだよね?」

できたの?!と期待を込めた目で七海の方を向く。

七海は琴乃の方を向く。

「anfangの人たちも同じことを思ってたみたい。」

香南の方を見ると怒りながらも顔を真っ赤にして電話をしていた。

「最近香南の行動が少しおかしかったのもそのせいみたいよ。」

「そう、だったの……」

七海は意を決し香南の方へ行くと香南がこちらに意識を向ける。

香南は七海の目上使いに照れながら呼びかける。

「なっ、七海……?」

「香南さん!」

携帯を離れた隙に再び唇を重ねる。

香南が携帯を落としがたんと倒れると携帯から香南?!と大きな声が聞こえてくる。

「kiss奪っちゃいましたね?」

照れながら言う七海に香南は何も言えず顔を真っ赤にするだけだっ
た。

何もしないその唇には

彼女の悪戯な唇が

降り注ぐ

K i s s t h e g i r l ! 0 2

B L 有 (後書き)

お待たせしました！

香南くんの休日　　BL有（前書き）

一緒に暮らしはじめて初めての長期休暇の話

香南くんの休日 BL有

「というわけで明日から5日間おやすみだ。ゆっくり休んできてくれ。」

雅のこの一言にメンバー狂喜乱舞する。

「やったー！！周！旅行行こう旅行！」

「いいねえ。」

「ひっさびさに香川までドライブ行って讃岐うどん食い放題ツアー行ってくるかなー。」

それぞれ楽しそうにしていたが唯一香南だけが困惑の表情だった。

「？どうした？ななちゃんたちと暮らして初めての長期休暇だろ？」

「・・・ああ」

香南のその表情に夏流がにやりとする。

「わかったー、香南したいことわかんないでしょ？いーじゃん、自分のしたいことしたら！ななちゃんとデート、とか」

「！！！！」

香南が顔を真っ赤にする。

「おお、いーな。どうせデートしてないんだろ？ついでにさ、日記書いてこいよ！思い出に残しておくのも大事だぜ？」

「・・・」

燎を睨むが燎はまるで気にしていないようだった。

「いいね！ねえ、書いてきてよ！！俺も凄く気になる！！！！デートの日記！」

「ナツ、お前まで……」

「・・・おねがーい」

「明日から、5日間おやすみになった。」

「ほ、ほんとですか!？」

「「おやすみー!」「」

食事中、突然述べた言葉に七海は笑顔になる。

双子もワイワイ嬉しそうだった。

「ではゆっくりできますね!」

「いや、」

「?」

5日後久しぶりに集まったメンバーはとても楽しみにしていた。

そう、香南の日記がとてつもなく気になっていたのだった。

スタジオに入ってきた香南はとても機嫌の良さそうだった。

「香南、休みはどうだった?」

「ああ、」

顔を真っ赤にとても照れていた。

「とても、楽しかった。」

その顔は今まで見せたことのないような照れくさく、しかし誇らしげな顔だった。

「日記は!？」

夏流がニヤニヤしながら手を差し出す。
それに少し嫌そうな顔をしたが仕方がないと鞆の中から日記を出した。

「どれどれ…」

×月 日

休日一日目。

気づけば1時まで寝ていた。七海は疲れていると思って起こさなかつたらしい。

悪いことをした。

七海がせつせと家事をしていたので俺も手伝うことにした。
洗濯はとて大変な仕事だった。

しばらく二人で家事をしていると双子が帰ってきた。

双子が一緒に遊ぼうと誘うので一緒に遊ぶ。

その間七海は買い物に行った。少しさみしいかった。

夜ご飯の準備は双子も一緒に手伝いお好み焼きだった。

皆で切った具材はどんなものよりもおいしかった。

気づけば夜だ。明日は朝から手伝いをしたい。

「えーと、これなに？」

「見ればわかるだろ？日記だ。」

「それはわかるけど!!」
「次の日もしれねえぞ!？」

x月 日

今日は朝から忙しかった。まず双子の学校の登校安全を守るための交通整備の担当がちょうど当たっていたため七海と一緒に双子を送りながら小学生を見守る。
うちの双子が一番可愛かった。

「ちょっと、なにこれ。」

「何ってだから交通整備に行ったんだろ。」

「いや、そうなんだけど」

「お前よバレなかったな。」

「ああ。帽子かぶってたし眼鏡もしてたしな。どこかのもっさいおっさんにしか思われてなかった。」

「() いや、それは絶対ないな」「」

奥様方と七海の話を見つめて後一緒に帰る。

今日は七海が柳田琴乃と家で会うからと急いで家の片付けをする。

(しかしきれいなのですぐに終わる)

二人の話を聞くのは悪いと自室で読書。

七海が柳田琴乃から借りたと言つ漫画を読む。

わけがわからなかった。

夜は柳田琴乃も一緒にご飯を食べる。

今日のごはんは俺の大好きな七海特製煮物だった。

ありがとう、七海。

「次に期待しようか。」

x月 日

今日は土曜日ということもあって朝から家の庭の草むしりをした。皆で流した汗はとても眩しい。

昼は昨日の煮物だった。味がさらにしみ込んでいて美味しかった。

昼からは双子の所望していたショッピングモールへ行った。

あまりにひどい人ゴミというわけではなかった。なので何とか乗り切れ

た。

双子の喜ぶ顔が何より行ってよかったと思わせる。

夜ご飯は双子が行きたいと言ったためずっと前の打ち上げで行った焼肉屋へ行った。

前より味が落ちたんじゃないか？

七海のごはんの方が100倍うまい。

夜は皆で映画を見た。

最後の方になると七海が泣くものだから必死に涙を拭い宥めた。

双子ももらい泣きしてしまい、皆で宥め合う。

俺まで泣きそうだった。

初めてと言っていいぐらい4人で一緒にいたので離れたくないとリビングで川の字(+俺?)になり皆で一緒に寝る予定だ。

おやすみ、美羽、瑠唯、七海。

「普通の家庭話じゃねえか!!! まあ確かに良い話だけど！」

「もしかして、次の日も…?」

x月x日

今日は朝からネズミーランドへ行った。

久々に行ったネズミーランドに双子や七海もおおはしゃぎ。

双子がいるためあまり乗り物には乗れなかったがそれでも楽しんでいた。
シヨ一の閲覧席も当たり嬉しそうに踊る双子を見ていると本当に来てよかったと思う。
帰りに撮ってもらった4人での写真はまた一つの思い出として残っていった。
そう言えばデートをしていない。
明日は、誘ってみようと思う。

「きたね。」
「来ましたね。」
「早く次のページ……！」

×月 日

今日は朝デートに誘ってみた。
すると双子も一緒に行きたいと言ったので4人でデートすることになった。
場所はネズミーシー。双子は学校があるので帰りに迎えに行き急いでネズミーランドへ向かう。
少し大人な気分を4人で味わい、豪華客船に乗り4人で乾杯。（もちろん皆ジュース）
せっかくだからと4人でおそろいのものを買った。皆使うシャープ

ペンだ。

俺も明日から仕事で使って行きたいと思う。

あと七海はとあるキャラクターのぬいぐるみが気になるらしい。

よくよく見ると他の来ている人たちは皆そのぬいぐるみを持っていた。

男と女のを買い、更に洋服まで買う。まるで子供が増えたようだ。

しかしとても嬉しそうに喜ぶ七海を見るとどうでもよくなる。

今度来た時も服をたくさん買ってやるう。

そっだ、いつかデザイナーの岡崎さんに頼んで作ってもらうのもいい。

4人のデートは想像していた以上に楽しかった。

「……まずデートって意味から覚えようか。」

「……は？」

香南くんの休日　BL有（後書き）

くだらない話ですいません（笑）

成長の欠片 前編（前書き）

美羽&瑠唯小学1年の話です

成長の欠片 前編

君の秋は

どんな秋？

clarity love 成長の欠片 前編

「にーちゃんーうんどうかいー！」
「ぼく、あかぐみなの一！」
「…うん」

食事中突然の言葉に頭の上にはてなマークを浮かべる香南。
それをみて苦笑いをする七海。

「香南さんを困らせては駄目よ。」

「けどうんどーかい！」

「かけっこ!!!」

「うんわかったわかった」

七海はちゃんと事情を分かっているようだ。

椅子から立ち上がり予定表がたくさん張ってあるところから一枚の紙を取ってくる。

それを香南に渡す。

「来月の最初の日曜日に運動会があるんです。」

「うんどう、かい？」

「二人とも小学校に入って初めての運動会でとても張り切っていて、お仕事だとは思うんですけど、時間が開いてる時間で良いんです。少しでも、見に来てくださいますか？」

運動会という言葉をいつ振りに聞いたたろうか。
前を見ると目をキラキラさせる双子たち。
そして横には上目遣いの七海。

「明日雅さんに聞いてみる」
「っ！はいつ！！！」

この笑顔に弱いんだ。

苦笑にならざるを得ない香南だった。

「雅さん」

昼休憩、香南は七海のお弁当を広げ、お茶をマグカップに入れながら隣で昼からのスケジュールチェックをしている雅に尋ねた。

「ん？どうした？」

「来月の最初の日曜って何かスケジュール入ってるか…？」

「最初の日曜…？」

雅さんがスケジュール帳をチェックしてくれている。それを聴いていたメンバーが集まってきた。

「えーなになに？どうしたの??」

「何かあったのかい？」

「いや、その、」

言おうか言わまいか迷っていると雅が再び口を開いた。

「あ、一応チェックとかの仕事は入っているけど…」

「そうか。」

「だからなんなんだよ。」

とても楽しそうな笑顔に言うのをためらう。

「その日、双子の運動会なんだよ。」

「『運動会？』」

「あいつら小学校での初めての運動会だつて来て欲しいらしくて…
雅さん、夜入るから、朝から夕方までのスケジュールを開けてくれないか…？」

雅は驚いていた。香南が自ら休みたい日を指定してきたのは初めてだったのだ。

もちろんこの業界で休みたい日に休めるなんてことはほとんどない。それでも夏流はもちろん、周や燎も休みたい日を指定してきたことはあった。

しかし香南は一度も言ってきたことがなかった。

昔雅は一度だけ聞いたことがある。

『香南、お前休みたい日はないのか？』

すると香南はとてもつらそうに笑みを浮かべて雅の方を見た。

『休みたい日って、何するんだ？何もすることがないのに指定しても仕方がないだろう？』

それが今、自ら言ってきてくれる。

日向家パワーは本当に凄い。

雅は改めて思った。

「わかった。じゃあなるべく開けておくよ。」

「ありがとう」

「えー！じゃあ僕も行きたい！」

「…は？」

夏流が横から口を挟んできた。

その後ろを見ると周も燎も同じような顔をしていた。

「双子ちゃんの活躍をビデオで撮る係、多い方が良いでしょう？」

「俺らも一緒に手伝ってやるよ！運動会の”お父さん”の役割は大変らしいからな」

「お前ら…」

それからは昼ごはんを食べながら運動会に向けての作戦会議が行われた。

流石にばれたらいけないと思ったからだ。

七海と双子に言うところ人は大喜びで双子は特にはりきって練習に励

むようだった。

双子にとっても、メンバーにとっても様々なことがおこる運動会になりそうな予感がした。

成長の欠片 前編（後書き）

続きます（笑）

成長の欠片 中編

このレンズの向こうには

君の笑顔が

華やかにひかる

clarity love 成長の欠片 中編

運動会の前日、七海は双子を早めに寝かせる。

そう言えば昔、自分が小学生のころも両親に同じことをしてもらったのを思い出した。

思わず苦笑いをする。

懐かしさと共に下のリビングへ降りると香南が真剣な顔で運動会のプログラムを見ていた。

七海がリビングに入ってきたのに気付くと手まねきをする。ぴよこぴよこ香南の方へ向かうとプリントを一枚渡された。

「なんですか？これは。」

「運動会当日効率よく動けるように作戦を考えてきた。」

よくよく見ると一番上に『祝 運動会！がんばっちゃおうね 作戦』と書かれていた。

いつの間にこんな作戦会議をしていたのだろうか。

そして下にはメンバーの名前と七海の名前の横に何やら役割が書かれていた。

七海は昼ごはんを作る係だったが他のメンバーがどうもわからなかった。

「えっと、この雅さんの横に書いてあるのは…」

「ああ、それ場所取り係。場所取りって大変なんだろう？」

七海は小学生のころを思い出す。

運動会の当日、確かに朝お父さんはすでにいなくて、学校に行つて運動会をしているといつの間にもビデオ撮影をするお父さんがいた。そしてお母さんに場所取りが今年は何れだけ大変だったかを語っていた気がする。

なにより先日琴乃の親に運動会がどのようなものか聞いていたのだ。

『うーんそうねえ。場所取りが大変なのよ。小学生のころって親がはりきるでしょう？七海ちゃんのお家と連携して頑張ってたわねえ。』

この言葉に実際メンバーが来てくれるのに場所取りに失敗したらどうしようかと思っていたのだ。

ご飯も作るし、場所取りもとなると起きる時間に恐怖を感じていた。

「はい。何やら大変そうです。ですから雅さんに頼むのは……」
「いや、大変だからこそ雅さんに頼んだ方が良く。雅さんはこういうのにかけては天才だから。」

確かに、マネージャーという職業で様々な良い仕事を効率よく隙間に入れる能力にはたけているのだろう。
場所取りでもその能力を発揮してくれるかもしれない。
いい場所をきちんを見分け、そこに全員がくつろげるレベルの広さの場所を取る。

「まあ、雅さんがこれなら俺に任せてって言ってたし。」
「そうなんですか……では、お言葉に甘えて……」

そしてさらに下を見る。

「えつとこの夏流さんと周さんのビデオ係とは…？」
「ああ、それこれ。」

机の下でガサゴソしたかと思うと机に箱が二つ置かれた。

「うちにビデオカメラってないだろ？だから雅さんに空き時間に買ってきてもらった。二つあったら美羽と瑠唯どちらとも平等に取れるだろうし。」
「えええっ!？」

何事もないように箱を開け中からビデオカメラを取り出し説明書を読む香南。

七海は雅さんに明日謝ろうと思いつつ香南を見る。

香南がこんなに気合を入れているとは思わなかったのだ。

呆然としているとカメラの使い方がわかったのか香南はビデオカメラのスイッチを入れた。

「なな、テストするからそこに立ってくれないか？」

「えっ今からですか？」

「そう。」

真剣に画面を見つめる香南。

本当に、美羽と瑠唯の”お父さん”を一生懸命やってくれている。いや、香南だけではない。バンドのメンバーが一丸となってやってくれている。

七海が一人だったら今ごろどうなっていただろう。

お弁当作って、下手したら仕事が入ってそれだけで終わってしまったかもしれない。

自分が経験してきた思い出を作っただけじゃなかったかもしれないのだ。

本当に、本当によかった。

思わず涙が出そうになった。

「なな…？どうした…？」

香南が画面からふと顔をあげる。

七海は瞬きをすると首を振る。

「いいえっ何でもないです！！続きをどうぞ！！」
「…ああ。じゃあいくぞ。3・2・1はい」

ぴぴっという音に録画が始まったと緊張してしまう。
香南も最初は何も言わず七海を撮り続けていた。
しかしそれではいけないと質問をし始める。

「なな、えつと、明日はお弁当何を作りますか？」
「うわっはいつ！！明日は、たこさんウィンナーいっぱい作ります
！」
「うさちゃんもか？」

言わずもがな林檎の事である。
もちろんというように笑みを浮かべ頷く。

「うさちゃんもいっぱいです！あとはお楽しみです！この日のために訓練してきました！」

「そうか。それは明日が楽しみだな。」

香南も思わず笑いながら答える。

それでは明日をお楽しみにという声とともにぴっぴっぴという音がし、録画が終了した。

「これは使いやすいと思う。流石雅さんだな。」

「そうなんですか？あつではもう一つは私がテストしても良いですか？」

そう言いながらもう一つの箱を取り出す。

二つとも同じ機種の色違いを購入しているため使い方は一緒のはずである。

箱から機械を取りだすと早速準備をする。

「そこスタートボタン。」

「はい！！えつとでは香南さん！立ってください！！」

まさか今度は自分が被写体になるとは思っていなかったのだろう。
香南は驚いていた。

「あつもしかしてテレビ以外で写るのはいやですか？」

「いや、その…」

香南はまさかホームビデオに自分が写ると思っていなかったのだ。
照れくさそうにそれでも少し嬉しそうに立ち上がる。

「録画はこのボタンですね！それではいきますよー！3・2・1す
たーと！」

びびつという音と共に録画が始まった。

七海は香南と同様ズームなどの動作チェックをしているようだ。それが終わった後いそいそと質問をし始める。

「えといよいよ明日運動会です！意気込みをお願いします！」

「え？俺が？」

「はい！作戦では応援係やその他もろもろ係となっていますが、どうですか？」

「うーん……」

質問の答えを考えながらもこの心地よさに酔いしれる。

いつもの記者のインタビューはいやだけれど七海のインタビューはとても心地よい。

いつもインタビューする人が七海だったらいいのに。香南はついっと思ってしまう。

「あいつらが楽しめるように最大の努力をする。例えば、うさちゃん林檎と一緒に作ったり……？」

その言葉に七海が驚く番だった。

「え？」

「俺も一緒に作るから。たこさんウィンナーとうさちゃん林檎は任せろ。」

「……はい!!…はい!!…!!」

七海は満面の笑顔で返事をする。

「香南隊長! 明日はよろしくお願いします!!…!!」

「ああ、まかせろ。」

そして七海のビデオカメラを持つ手を下へ向けると七海のおでこにキスをする。

突然の事に七海は顔を真っ赤にしへたりと座りこむ。

「明日のご褒美、先にちよつとだけくれ。」
「・・・卑怯ですよ」

七海が録画を消すとおでこをこすりながら言う。
香南はにこりと笑うと七海を抱きしめ今度は唇にキスを送る。

今度は明日の成功を祈って。

成長の欠片 中編（後書き）

すみません。また続きます（笑

えっと、拍手の方追加しております。clarityなので見たい方はぜひぽちっと押してみてください^^

成長の欠片 後編その一

手をつないで歩いてきた君たちは

今は別の道を歩いている

clarity love 成長の欠片 後編その一

「ななちゃー！にいちちゃー！おはよー！」

「おはよう…」

「二人とも起きたのね。おはよう！」

「おはよう」

香南と七海が弁当を作っていると双子が起きてきた。

二人はもうすでに体操服に着替えておりもうすでに運動会行く体制が整っていた。

弁当はもう少しでできるところだったので残りそうなものを二人の朝ご飯に出す。

二人にご飯を出しているところこそと香南は携帯とカメラを持ってきた。

「二人とも、写真撮るぞ。」

「「しゃしん？」」

「？運動場でも取れるのでは？」

七海が不思議そうに問うと香南が真剣にシャッターチャンスを狙っていた。

「家で撮るのも良いだろ？なかなかないんだし。おいお前からこっち向け。」

「「はいー！」」

そしてパシャパシャと写真を取っていく香南に苦笑いしか出ない七海だった。

双子を先に学校へ向かわせお弁当を完成させると歩いて学校へ向かった。

メンバーとは雅さんが取ってくれた場所で集合だった。

メールを確認しその場所へ向かうとすでにメンバーが集合していた。

「ななちゃん香南おっそーい！」

「うるせえ」

「すいません。」

燎はセンスの良いジャージを着ており、まるで自分が運動会に出るような感じだった。

周と夏流はジーパンにTシャツ、上にパーカーを着ておりなるべく動きやすい恰好をと配慮したようだった。

場所を取ってくれていた雅さんはいつものように上はYシャツ、下は黒のズボンをはいていた。

全員サングラスをかけており、ある程度ばれないようにの配慮はしてきたが、まわりの人間からしてみればどこの芸能人がやってきたのだと言う状態だった。

いそいそとその場所へ座ると夏流と周にカメラを渡す。

二人に使い方を説明し、早速取りに行ってもらおう。

「えっと、美羽は紅組、瑠唯は白組です。」

「おっけー！まかせておいて！みうみうをかつこよく取ってくるよん」

「まあ、さつき撮る絶好のポジションを見つけたからね。まかせておいて。」

「よろしくな。」

入場が始まり香南は七海と一緒に見に行く。

同じことを考えている保護者が多いらしく人ごみに少し入らなければならなかった。

「香南さん、大丈夫ですか…？」

すると香南の手が七海の手をぎゅっと握る。

「ずっと握ってもらっていても良いか？」

「はっはい！」

二人で笑い合うと一緒に人ごみに入ってしまった。

双子たちは入場にとても緊張しており、こわばった表情だった。

その表情さえも愛しく、香南は写真を撮りまくる。

入場が終わると早速と競争が始まった。

運動が苦手な瑠唯は最初の方だった。

とても不安そうな顔をしている。

しかし、その後ろの方から「るいくんがんばってー！」と女の子の声援があった。

「瑠唯って、もててんのか…？」

初めて知った事実には香南は驚く。

「えと、先日女の子からラブレターをもらったと困った顔をされま

した。」

「本当か?!」

「ええ、なにやら瑠唯のクラスは強気な女の子が多いらしいです。」
微笑ましく見ていた七海だったが香南は少し女の子を見渡すように
つぶやいた。

「変なガキだったらただじゃおかねえ。」

「え」

「ませたくそガキだったら、もう瑠唯に二度と近づけねえ。」

七海はぎよつとして香南を見る。その目は本気だった。

「か、かなんさん、その、まだ小学生ですし。ませても仕方ないですよ。」

「結婚したいとか言うんだろ?ふざけんじゃねえ。七海以上のやつ
じゃねえとぜってえ結婚させねえ。」

香南の本気の目にどうしようと思をきよるきよるさせる。

香南は美羽と瑠唯にとても甘い。

親バカと言うか孫を持ったおじいさんというか。

ある意味娘を結婚させないという親と同じようなものだと思った七
海だった。

ピストルの音が鳴り瑠唯が走りだす。

緊張していたのか途中で転んでしまう。

「ああつ!?!」

「瑠唯!?!」

思わず場内に入りそうな香南を見て七海は腕を引っ張る。

「駄目ですつ!?!瑠唯が今頑張ってるんです!?!」

「けど!」

「ほら、見てください!」

瑠唯を見ると今にも泣きだしそうだったが一生懸命立ち上がり走り出し無事ゴールした。
そのゴールに観客席からも拍手が沸き起こった。
上級生に救護室に連れていかれる瑠唯の顔はとても嬉しそうで、見ているこっちも何か心を揺さぶられた。

「瑠唯たくさん褒めてあげましょうね。」

「ああ。」

美羽は運動神経抜群なので最後のレースだった。

自信満々にどこか楽しみにスタート地点に立つ美羽にまたもや女の子からの声援。

双子はどちらも人気のようだった。

走り出すと美羽がダントツ一位で学年でトップの記録だったようだ。

「美羽も凄い!!!」

「流石だな。」

どちらもとてもいい走りを見せてくれ香南も七海も満足だった。

無事見終えスペースに帰ってくると燎がいなかった。

「雅さん燎は？」

「あー燎なら係をしに行ったよ。ほら、『サポート係』」

「ああ。」

燎は二人が運動会で何か不便がないように水筒を持って行ってあげたり暑かったら冷やしたタオルを持って行ったりのサポート係だっ

た。

運動選手でもこんなにしてくれる人がいるかわからないのに双子は本当に恵まれてるなと七海は思っていた。

「瑠唯くん倒れたんだらう？だから様子を見に救護室の方へ行つたよ。」

「そうか。」

「まあ、あんまり大勢行ってもなんだしここでゆっくり待とう。」
雅さんはそう言いながら二人にお茶を出してくれた。

「よっる〜い」

「あ、りょうにーちゃ」

「りょうにーちゃ！！！！」

燎が救護室へ向かうと美羽も一緒にいたらしく瑠唯はちょうど消毒してもらっているところだった。

「おっ美羽もきてんじゃん。一位おめでとう流石だったな！！」

そう言つて最初美羽を抱きあげ頭を撫でまくる。美羽はまんざらでもなさそうに嬉しそうな顔をする。

次は瑠唯の方を向き消毒が終わったことを確認する。

「瑠唯も、ちゃんと自分で立つて、走つて偉かったな〜！」

瑠唯を燎は抱きあげ頭を撫でる。すると瑠唯はとても恥ずかしそうに顔を真っ赤にする。

「にーちゃ、僕、もう小学生だよ？」

「わーつてるよ！よっしゃ、じゃあお兄ちゃんになった瑠唯くんと美羽くんを自分たちの席のところまでお送りしましょうかねえ？」

「やったー！！」

「だいじょうぶ、だよ」

「俺がしたいんだよ。ほら、いくぞ」

おろしてあげ救護室から出る。外には夏流と周が立っていた。

「るいるいみうみう〜!!」

夏流はがっちり離さないと言う様に二人を抱きしめる。

「瑠唯くん大丈夫かい？」

撮影しながら周が心配そうに尋ねる。

「るいね、しょーどくしてもらった！」

「うん、だいじょうぶ、ありがとう」

笑顔で答えると周も夏流も笑顔で満足そうにならず。

まず白組に送ると美羽が瑠唯を指さす。

「これからはてきどーしだぞ！」

「わかって、る」

「まけないぞ！」

「ぼ、ぼくも・・・!!」

二人はぷんとそっぽ向くと瑠唯は白組の自分の席へ戻っていった。

二人の戦いに目が離せないなとメンバーはニヤニヤしたまま美羽を紅組へ送っていった。

午前中一年生最後の競技大玉転がしだった。

これは二年生と一緒にやる競技で小さい一年をいかに二年がサポートできるかが勝負だった。

美羽はホープなのかやはりいい具合に玉を転がし二年生についていた。

しかし、作戦が良かったのか結果は白組の勝ちだった。

楽しいお昼の後、午後からの競技が始まる。

成長の欠片 後編その一（後書き）

すいませんやっぱり後編にまとめられませんでした（笑

成長の欠片 後編その2

宝よ

雫が落ちないように

宝よ

どうか笑っていてくれ

clarity love 成長の欠片 後編その2

昼の時間になり瑠唯と美羽が七海たちのスペースへやってくる。
事前に教えてあったためすぐ向かうことが出来たようだった。
しかしやってきた美羽の顔は笑顔なのに瑠唯の顔はしょんぼりとしていた。

「ななちゃ！まっきーのかおだ！！」

「まっきー・・・」

そう、七海はキャラクター弁当を作ったのだ。
前から運動会の日にはいつもの違う弁当を作りたいと思っており思い切ってキャラクター弁当を作ったのだ。

「これはまた凄い。」

「ななちゃん本当に器用だね・・・」

「うーん、これは俺たちのツアーの時にも作ってきて欲しいものだねえ」

「次はマニーちゃんもお願いしたいね。」

メンバーも感動したようでシャムを撮ったり眺めていたりした。そして食べ始めるが瑠唯の顔が段々暗くなっていた。

「瑠唯……？どうした？」

香南が声をかけると瑠唯はとうとう泣き始めた。隣の美羽は心配そうな顔をするものの少し起こった声で話し始めた。

「るい！やくそくだろ！」

「だってみうのほづがはいもん……！」

「それはかんけないだろ！」

とうとう喧嘩し始めた双子に七海と香南の仲介が入る。七海が瑠唯を押し香南が美羽を抑える。

「ストップストップ!!どうしたの一体!」

「落ち着け、どうした?」

「うっう。」

「ないたってだめだろ!やくそく!」

「だからその約束はなんなんだ?」

香南が美羽を抱き上げ顔を同じ高さの位置間でもって行きたずねる。すると美羽も泣き出しそうになっていた。

「たいふうのめ、にーちゃんとするのかけっこのじゅんいできめる
ってやくそく」

台風の目とは一年生の父兄参加で子供と父兄のペア二組が何列かになり競う競技である。

確かに、組が違うので一人がどちらかに出るのが普通である。

それを瑠唯と美羽はかけっこの順位で決める約束をしていたのだ。

「るいもぼくもやくそくしてたんだ!」

「けど、だって!！」

とうとう二人して泣き始める。

七海が宥めても首を振るだけで出たくなと言い始めた。

香南は嬉しそうな、困ったような複雑な顔をしていたが、双子の方に向かって話し始める。

「わかった。二人とも頑張ってたし、先生に事情を話して出させてもらうから。」

その言葉に双子がぱっと顔を上げる。

「ほんと?」

「ああ。だから、泣くな。な?」

「香南さん……」

七海が心配そうにたずねる。
人が多いところに出るのだ。
しかし香南がにっこりと笑う。

「二人のご所望だ。やりしかないだろ？」

その顔はお父さんそのものだった。

成長の欠片 後編その2 (後書き)

続きは今日か明日書きます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4588v/>

clarity love 番外編

2011年12月10日18時58分発行